



## 冒頭数分の挑戦

菅瀬 晶子

民博 超域フィールド科学研究所

## 映画本来の真価

足首まで届くアバーヤ（外套）に黒い革靴を身につけた少女たちが、教室に並んで立ち、宗教の授業でイスラーム宗教歌を歌っている。あまり集中している様子ではない。なかでも一人だけ、紫の靴紐をとおしたコンパースをはいている少女はとりわけつまらなさそうだ。そんな態度を教師に見とがめられ、彼女は炎天下、屋外に立たされる。見る間に額には玉の汗が浮かび、彼女はむき出しの頭を掌で覆い、ぎらつく太陽をうらめしげに見上げる。

二〇一二年に制作されたサウジアラビア・ドイツ合作映画「少女は自転車にのって」は、こんな場面で幕を開ける。利発だがはねっかえりの少女ワジダが、自転車に乗って近所の少年と対等に勝負したいという、日本や欧米ではごくあたりまえ、しかしサウジアラビアでは非常識きわまりない夢をかなえるために奮闘する本作は、ヴェネツィアほか幾多の国際映画祭で上映され、高く評価された。極端に復古主義的な国教、イスラーム・ワッハブ主義の厳格な解釈ゆえに、映画館が墮落した娯楽として長年禁じられてきたサウジアラビアで制作された初の長編映画であること、しかも脚本も手がけた監督のハイファ・アル・マンスールが、サウジアラビアでは極度に抑圧された存在である女性

であることに、注目が集まりがちである。しかしながら、むしろ本作の真価は、物語に込められたメッセージの普遍性、そしてその描写の巧みさにある。中東の家父長制に抑圧された女性の自立と解放への願いが本作のテーマであるが、物語が進むにつれて、先ほど紹介したわずか数分の冒頭の場面で、監督がじつにみごとにそれを描写していることがわかる。本稿では、映画のあらすじを詳細に紹介するよりも、その読み解きを試みることにしたい。

## ワジダの願望と女性の服装

自転車をはしがって母親や教師を困惑させる主人公ワジダの奔放さは、彼女の服装にもあらわれている。

が束縛される傾向があるのはこのためである。

自転車に乗って、男の子と対等に競争したいというワジダの願いは家父長制の因習への挑戦であり、冒頭の場面は、そんな彼女への家父長制社会からの罰である。しかしながらその罰ゆえに、ワッハブ主義の解釈ではヒジャーブを身につけるべき場所で、彼女はヒジャーブを与えられていない。さらにイスラーム以前の本来のヒジャーブの役割を考えれば、彼女への罰には二重の矛盾がある。イスラームの教えの解釈には個人によって幅があり、信心はおのおのの心に宿るとされるが、因習によって解釈がゆがめられることもある。服装や行動、そんな些末なものでしかはかれぬ、ゆがんだ信心の欺瞞。本作は細かな描写で、そこまで踏み込んでいく。自身の密通には口をぬぐい、ことあるごとくにワジダを目の敵にする校長の描写は、その最たる例である。

アブラハム一神教と総称され、源を同じくするユダヤ教とキリスト教、そしてイスラームは、いずれも家父長制に支配された中東の部族社会の宗教として成立した。「父なる神」という唯一の神の表現は、その最たるものである。部族内外の血縁関係が重視される家父長制では、女性に貞潔が求められる。アブラハム一神教において、女性の行動の自由

もう一人の主人公であり、娘に触発されて幼稚な夫から自立するワジダの母親についても触れたかったが、紙数が尽きた。近年サウジアラビアの女性たちの状況も急激に変化しつつあり、先日（六月二十四日）はついに、女性の自動車運転が解禁された。本作で描かれる女性の抑圧は、すでに古いものになりつつある。ヨーロッパで作品を撮っていたマンスール監督も、次作はふたたび母国を舞台にするという。奇をてらうことなく、正統派の手法で勝負できるアラブ世界の映画監督としては、レバノンのナディーン・ラバキーに比肩しうる存在である彼女が、変わりゆくサウジアラビアの女性たちの今後をどう描いてゆくのか、じつに楽しみである。



サウジアラビア、ジェッダ旧市街で見かけた広告。ワジダと同年代の女子児童の制服の広告だが、1年前には女性モデルがポスターに登場するなど、ありえなかったという（2018年）

サウジアラビアでは在留外国人も含め、女性には公の場でのヒジャーブ（髪を隠すスカーフ）とアバーヤの着用が義務づけられており、ワジダも通常は一応身につけてはいる。ただし髪はみ出し放題、アバーヤの下からジーンズや校則違反のコンパースが頻繁にあらわになり、そのたびに反抗的だと校長に叱責される。じつはヒジャーブとアバーヤは、イスラームでは正しい女性の服装とされているが、コーランには一切言及されていない。コーランは、女性はくるぶしと手首から上、そして胸元を隠すべきと説くのみである。本来は強烈な日光や砂塵など、中東の過酷な自然環境から身を護るために身につけられていたヒジャーブとアバーヤが、イスラームの教義上、正統なものと定義されるに至っただけなのだ。女性に両方の着用を義務づけているのは、サウジアラビアのみである。